

新刊
和
尾
集



昭和二十九年八月十日 初版印刷
昭和二十九年八月十五日 初版發行

昭和文學全集 42
内田百閒 尾崎一雄 集
高田保



著者

内田百閒
高田保雄
尾崎一雄

發行者

角川源義

印刷者

小田茂作
東京都品川区大井寺下町一四三〇

發行所

株式會社
角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ七

振替東京一九五二〇八
電話九段〇一一一〇一四

本文紙 本州製紙株式會社
クロース 日本クロース工業株式會社
整版所 扶桑印刷株式會社
印刷所 東日本印刷株式會社
製本所 荒木製本所



高田 保

昭和二十五年夏（五十五歳）



内田 百閒

昭和二十七年一月（六十四歳）



尾崎 一雄

昭和二十六年三月（五十三歳）

内田百閒
高田保
尾崎一雄集

昭和文學全集
角川書店版

卷頭寫眞

内田 百閑
高田 保集
尾崎 一雄

内田百閑集

筆 蹟

贗作吾輩は猫である

百鬼園隨筆

盡頭子

鯉

梟先生

特別阿房列車

列車食堂

搔痒記

漱石先生臨終記

解 說

年 譜

高橋義孝

高田 保集

筆 蹟

ブラリひょうたん

法隆寺

税金と文化

衆 望

火の用心

自然發生

寫し時代

人間と動物

誕生日

賢人愚者

非當世風

母の話

ふたたび母の話

氣 轉

若芽の雨

しゃぼん

菊五郎・ウィル・夢聲

未完成發明

牡丹

平凡の喪失

非盜難

安井さんの幸福

君死に給ふことなかれ

片手落ち

叱られて

人間危機

大感傷

一四〇

一四一

一四二

一四三

一四四

一四五

一四六

一四七

一四八

一四九

一五〇

一五一

一五二

一五三

一五四

一五五

一五六

一五七

海へ

隣人

暴力

獨り舞臺

喧嘩相手

アロハ

緣臺ばなし

保守

スズキ

商法

藤村忌

名月

主義

秋の夜

奈落

奈落(ツツキ)

平平平平

逸話

權威

曼珠沙華

頭痛

看板

拳骨

國語國字

庶民

一五八

一五九

一六〇

一六一

一六二

一六三

一六四

一六五

一六六

一六七

一六八

一六九

一七〇

一七一

一七二

一七三

一七四

一七五

一七六

一七七

一七八

一七九

一八〇

一八一

一八二

三味線 時代 マーク 蟲 血統 町醫者 變り方 昔話 十等車 禍福 イヤリング 法隆寺 五重塔 別院 滑稽車 師弟 名聲 曆日 美と不便と 文化の方向 畫伯 雪 愚妻 デスク・ブラン 一藝 餘計な發明

井上正夫 再び井上正夫 近代ジャーナリズム 水爆コンクール 愛護 小町と紫式部 アメリカ 肖像畫 眞實のための平和 新日本 花 話しことば ミス日本 ○の恐れ 隔離 スエーデンに詫げる 楠山正雄さんを悼む 齒について 北歐の太子 わが悲願 河童ひょうろん フェイヤ・ブレイ 戀文 續戀文 犬の話

大磯ばなし サラリー私談 男女について 接吻考 寢室の思想 藤村書齋 英雄 ブラリひょうたん日記 俳句 解説 年譜 尾崎一雄集 筆蹟 暢氣眼鏡 猫 芳兵衛 玄關風呂 なめくち横丁 懶い春 解説 年譜 浅見 淵 高見 順

内田百閒集

川泉願をふしをう薊かな 百聞

贗作吾輩は猫である

第一

鳥の勘公が行水を使つたり、水葵を喰ひ散らしたりした水麴におつちて、吾輩はもう駄目だと思つたから、天璋院様の御祐筆の妹のお嫁に行つた先のおつかさんの甥の娘だと云ふ二絃琴のお師匠さんの許の三毛子の法事に聞き覺えた南無阿彌陀佛を唱へて、麴の縁を無闇にがりがり引つ掻くのを止めたのだが、猫と雖も麥酒を飲めば酔つ拂ひ、飲んで時がたてば酔ひはさめる。どのくらゐの時が過ぎたか、歲月が流れたか、變轉極まりなき猫の目を閉ちて麴の中に一睡した間の事は知らないが、氣がついて麴の縁から這ひ上がり、先づ身ぶるひをして、八萬八千八百八十本の毛についた筆を拂ひ落とした。

矢つ張り晩の様で向うの方に大きなお月様が懸かつてゐる。これから昇つて行くところなのだらう。麴に這入る前には、お月様今晩はと云ひたい様だつたが、今は毛頭そんな氣持はない。いやに光りがなくて、のつべりして、月には毛が生えてゐない。人間の顔とおなじ様な片輪だ。毛のない物を見ると、に

がにがしい氣がする。月に背いて歩き出したから、身體を動かした途端に咽喉の奥からかすかな麥酒のげつぶが出た。

向うに大きな池がある。似た様な景色だ。池を左に廻つて、板屏の穴から手近かの家の中へもぐり込んだ。苦沙彌先生の家よりは小さい様だが、兎に角落ちつく所を見つければならない。細戸に開いてゐた障子の隙間から座敷に上がり込んで邊りを物色する。間境の襖が少し開いて明かりが洩れてゐるから、その間に前脚を入れて吾輩が這入れるだけ襖を開けた。こんな藝當はお茶の子である。

開けた所は茶の間で、柱の前に五分刈頭の大入道がきちんと坐つてゐた。鼻の下に白髪まじりの口髭を生やして何かぶつぶつ獨り言を云つてた様だが、吾輩が黙つて這ひ込んだのを見て、毬栗頭の毛を一本立ちにした様な顔になつた。季節外れの八ノ字髭なんかおつばやとして大層もない顔をしてゐる癖に、この大入道は案外小心なのかも知れない。身動きもしないで、ちつと吾輩の方を見つめたまま、小さな聲で、

「しつ」と云つた。初對面に黙つてゐても惡いから、吾輩も靜かに一言「にやあ」と奏して應へておいた。

大入道が吾輩から目を離さずに、口の中で「おいおい」と云つた。するとお勝手と思はれる方で返事の聲がしてそつちの襖から小さ

なお神さんが顔をのぞけた。お神さんでは無い。大入道が口髭を生やしてゐるくらゐだから奥様なのだらう。しかし吾輩が人間社會に伍して得た經驗から判斷するに、大入道の鼻下髭に拘らず、お神さんを以つて稱し遇するものが適切であつて、奥様と云つては失禮に當たる底の婦人である様だ。

「おや」と云つて立ち竦んだ。

「あらいやだ。猫が。何でせう」

「自分で襖を開けて這入つて來た」

「まあ。年を食つてゐるんだわ、きつと。でも器量よしね、この猫は。尾つばもちやんとしてゐるし」

新道の二絃琴のお師匠さんや、その家の女中から、吾輩は教師のこの碌でなしの野良猫と罵られ通して、承服したわけではないが、自己の容色に就いて自負すると云ふ氣持はなかつた。はからざりき、大入道の小さなお神さんに百年の知己を得んとは。

「つまみ出してしまへ」

「さうね、でもかうして自分で這入つて來たのでせう。鼠の穴をいくらふさけても、ふさけてもどこから這入つて來て、昨夜も人參の胴中に穴をあけたわ。置いてやりませうよ。きつと鼠が出なくなるから」

「家の中をのそのそ歩き廻つて、勝手に襖を開けたり閉めたりしやしないか」

「まさか。襖を開ける事は知つてゐても、後を閉める事はしませんよ。猫が一そんな事

をした日にや、をかしなものね。
「開けつ放して家の中を横行瀟歩させるのか」

「いいわ、あたしが後から閉めて廻るから」
大入道が未だ吾輩を飼つてもいいと、はつきり云はない内に、已に吾輩の入籍は認められた様な形勢になつて來た。有り難いからお神さんの膝に近づき、少しく咽喉を鳴らした。お神さんは吾輩の頭を軽く叩いて、もう一度、
「ほんとに器量よしの猫だわ」と云つた。
それから片手を吾輩の頭に載せたまふ、
「もうお膳を出してもいいんでしょ」と大入道に聞いた。

「いい」
驚いた事には、この時間になつてまだ晩飯の前らしい。苦沙彌先生の家では思ひも寄らぬ事である。しかし今の吾輩にその方が好都合な事は云ふ迄もない。

柱に靠れた大入道の前にちやぶ臺を置き、お神さんがお勝手からいろいろな物を運んで來た。吾輩はうるさくない潮合ひを心得て、狭い家の中を行つたり來たりするその足許について廻つた。一通り小鉢や皿や小井に盛つた物を出し終つて、お銚子を添へ、お勝手に戻つて鐵瓶に次の爛德利をつけてから、「缺けたお皿はなかつたか知ら」とお神さんが獨り言を云つた。吾輩はつつましくにやあと一聲鳴いて邪魔にならぬ隅つこの方に坐つてゐる。

事務所欄の奥をがたがた云はせて、お神さんは藍模様の大きな皿を取り出した。成る程、縁が缺けてゐる。その上に麥の澤山混じつた御飯を盛り、上から鍋の底に残つた汁を掛け、紙袋に手を突込んで煮干しを五六匹摘み出してその上に振り掛けた。吾輩は咽喉が鳴り廻る様に垂れる様であつたが、何しろ初めての家であり、ここが我慢の仕所と觀念してちつとお神さんの手許を見つめてゐる。

「おや、出來過ぎたか知ら」

吾輩に供せられる計りになつてゐるお皿をその儘にして、鐵瓶から爛德利を引き上げ、指先で濡れた徳利の尻を撫でてゐる。その上の苦沙彌家では見た事のない光景である。布巾で濡れた爛德利の肌を拭き拭き茶の間の方へ持つて行つた。後には煮干しの掛かつたうまさうな御飯が吾輩の鼻の先に置きつ放しになつてゐる。つらつら思ふに、吾輩も勘公の廻入りを境として随分と劫を経たものである。昔、寒月君が椎茸を食つて前歯を缺いたお正月に苦沙彌先生の家へ年賀に來て、出された口取りの蒲鉾を椎茸で缺けた前歯で半分食ひ切つた。後の残りの半分は後刻吾輩が失敬して竊かに頂戴したのを思ひ出す。その翌くる日は苦沙彌先生の食べ残したお雑煮の椀の底にくつついてゐた餅にうつかり歯を立てて七顛八倒の苦しみを嘗め、家ちゆうの笑ひものになつた。今かうして目の前に、鼻の先に吾輩が頂戴するときまつてゐる盛餐が据ゑ

られてあつても、一言お神さんから、さあどうぞと云ふ挨拶を受けない限り、吾輩は手を出さないのである。

お神さんはすぐに茶の間から戻つて來たが、手にはさつきのお銚子を持つてゐる。そこに置いた音を聞くところ、空つぽの様だ。今の間に大入道は一人で已に一本あけてしまつたの可知。按ずるに大入道は相當の酒呑みである。吾輩が廻入りの前に積んだ人間社會の經驗の中には然る可き酔つ拂ひはゐなかつた。この様子里は當分の間少勝手が違ふ思ひをしなければならぬかも知れない。

「おや、お前さんまだ食べないのかい」とお神さんが云つた。お前さんなんて呼ばれて、吾輩却つて忸怩たるものがある。「お行儀のいい猫だわ。それとも食べたくないのか知ら」

場數を踏み、劫を経た自制心で差し控へてゐるものを、食べたくなひのかとは聞こえませぬお神さんだ。怨嗟を籠めて、にやあと一聲奏しておいた。

「さうさう、まだあれが有つたつけ」と口の内で云ひながら、お神さんはかますの干物の頭を二つ取り出して、藍模様の皿の御飯に載せてくれた。

「さあさあお上がり、お待ち遠さま」と云つた。苦沙彌先生の奥さん、即ち珍苦沙の細君とは餘程調子が違ふ。さて、試みに口をつけ見るに、小さいながらも尾頭つきの煮干し、

かますの頭は云ふ迄もなく吾輩に取つて大平の滋味であるが、さつきお神さんが鍋の底から御飯の上に掛けた汁のうまい事、その風味は何にたとへる物もない。味は雞肉の出しであるが、その奥にもう一つ吾輩の味覺の記憶にない所がある。有りつたけ舌を伸ばして、べちやべちやと舐め且つ食つた。腹がふくれるに従ひ、ほのぼのとした氣持になつた。持つて廻らずに云つて仕舞ふが、酒を使つて雞を煮たのである。煮汁に酒の氣のある物なぞ廻り前の吾輩は想像した事もない。

吾輩にその御馳走を當てがつておいて、お神さんは茶の間へ行つた。猫たるの身分上、獨り喰ひのうまさ云ふ事には馴れてゐるが、今晩はまた一しほやれた。煮干しは云ふ迄もなく、かますの頭の骨も綺麗に食べ盡くし、お皿についた汁を丹念に舐めて、拭いた様にしておいた。後で更めて吾輩の食器を洗はなくてもいい。親切なお神さんに對する猫としての内助の一端である。

さつき見たところでは、今晩はいいお月夜の様であつたし、外はまだそれ程寒いと云ふ時候でもない。食後の散歩にそこいらを一回りして來たいところだが、何分まだ勝手の知れない所ではあり、又吾輩が出て行つた爲にお神さんや大入道が勘違ひして、折角來た器量よしの猫がもう行つてしまつたかと思はれては困る。今夜に限つた月夜でもないから、散歩は思ひ止まつて、大入道の酒盛りの模様

でも見學しておかうときめた。丁度三本目のお銚子を取りに來たお神さんの足許について茶の間へ這入つた。

大入道は一人で注いで酒を飲んでゐる。時にお神さんが注いでやる。お酌を受けるとか、獨酌で傾けるとか云ふ所なのだが、何れにしても吾輩の見馴れない光景である。大入道の顔に、いくらか照りが出ていると云ふ程度で、已に大分飲んでゐるらしいのに素知らぬ様子である。杯の合ひ間にちやぶ臺の上の物を何か知ら食べてゐる。どんな物が列んでゐるのか、後學の爲に見ておかうと思つて、靜かに、しとやかに大入道の膝の上へ上がつて行つたら、まだ上がり切らぬ内にひどい勢ではね落とされた。あやふく前脚の爪が出て大入道の膝頭を引つ掛けるところであつたが、吾輩自身の判斷で事無きを得た。苦沙彌先生の膝にはしつちゆう乗つてゐたものだが、矢つ張り工合が違ふ。

「お出で」とお神さんが云つて、吾輩を自分の膝の脇に引き寄せ、輕く頭を叩いてくれた。その位置から更めて大入道の手許を眺める。小さく切つたチーズの切れがあるらしい。箸の先にそれを取つて、食べるのかと思ふと、別の手で焼き海苔の切つたのを摘んで、くるくる巻いて、チーズの海苔巻きを拵へて、それを更めて箸に挟み、先に一寸醬油をつけてから口へ持つて行つた。をかした事をする大入道もあつたものだ。吾輩が見てゐて、チー

ズはうまさうだと思ふ。しかし海苔は甚だ始末の悪い食物である。猫の上顎に海苔が貼りついた時の處置は困難である。お難煮の餅を食つた程の事ではなかつたが、吾輩の海苔の思ひ出はよろしくない。考へても上顎の裏がくすぐつたい。

表の戸が開く音がした。苦沙彌先生の家の様に、ちりちりちりと鳴る仕掛けはなささうだ。御免なさいと云つたのだらう。何だか風の様な聲がした。

お神さんが起つて行つて、すぐに引き返し、

「風船さんですよ」と言つた。

吾輩は玄關へ出ないで、もとの所に残つてゐたが、大入道の顔を見ると、その聲を聞いた途端に陽氣な色が射した様だ。

「どうぞ」と大入道がどなる聲につれてそこへ現はれたのは、瘦せこけて、しなびて、さばさに乾いて、かますの干物を突つ立てた様な姿をした中年の男子である。

「やあやあ、これはこれは、ようこそ風船畫伯宛下」と大入道が云つた。口を利けば酔つ拂つてゐる。だれも來なければ内攻してしまふ所だらう。

「遅く伺つて相済みませんが、又先生さんにお願ひの筋がありまして」

おやおや、大入道の事を先生と云つた様だ。苦沙彌が教師で先生だつた流れを汲んで、大入道も教師なのか。それとも易者か辯護士か

揉み療治か、まだその正體を審らかにしないが、おまけに、先生にさんをつけて、先生さんと云つた。

「何の筋でも、よく入らつしやいました。筋は後で引つ張るとして、さあ先づ一獻」と大入道が杯を差した。「初めは馳けつけ三杯でお行きなさい」

「ところが先生さん、今日はまた朝來一粒一滴もと云ふ所なのでして」

「おや、それはいけない。風船の繫留索が切れまじしたか」

「先日から切れて居りまして。はい。相済みません」

さう云つてうまさうに酒を飲み出した。

風船畫伯の爲に新たに杯と小皿を載せた盆を持つて座に戻つたお神さんに、大入道が云つた。

「おい、風船さんは、また一粒一滴だとき」

「おや、そりやいけないわ」とお神さんが眞剣な顔をした。

「だから大急ぎで、即席のお吸物をつくれ。

初めはお酒と吸物で、流動物からだ」

大入道が云ひ終らない内に、お神さんはもうそこにあなかつた。

「お騒がせして済みません。しかし、もう馴れて居りますので」

「さうだな、その點は信頼出来る。しかしどうしたのです」

「雑誌のカットを描いて居りましてね。そつ

ちの手違ひで繫留索が切れました」

忽ち吸物が出来て来て、風船畫伯はうまさうに喫つてゐる。中身が何だか吾輩には解らなかつたが、話の節節で葛を入れ生姜を溶かした掻き玉だつた事を推斷した。少少浦山敷

い様だが生姜は御免を蒙りたい。しかし何人も吾輩に薦めてゐるわけではないから、この穿鑿は止めよう。

お酒が廻つて風船畫伯の貧弱な聲に張りが出来た。大入道が酒の勢ひで捕つて喰ひさうな調子だつたのに對し、立ちなほつた形勢である。

「風船さん、これをお上がんなさい」

「何で御座いますか」

「防風です。防風の根の油痛めです」

「ばうふうと申しますと」

「そらお刺身のつまにつける濱防風、あの根を痛めたのです」

「どんな字を書きますか」

「消防自動車防と、中風卒中の風です」

「はあ、さう致しますると、これはお薬ですか」

「薬にもなる様だが、八百屋ではこの根を棄ててしまふのだから、勿體ないから、かうして食べるのです。うまいでせう」

「おいしう御座います。何だか、またたびを聯想しました」

「またたびとは變だな。なぜです」

「この味は、いや味ではない、味はひだ。こ

の味はひは、三ツ葉の根に似て居りますでせう。三ツ葉は、またたびとどう云ふ關係がありますか。その邊がわたくしにはよく呑み込めないのです」

吾輩は咽喉から、思はず一聲にやあと出てしまつた。

風船畫伯が、ぎよつとした目つきをして吾輩の方を見た。

「失禮致しました、猫殿下。勘辨して下さい。

全くの所、不謹慎な話です。ねえ先生さん、

猫にまたたび、鯨にしやちほこ」

「それは話が違ふよ、風船さん。濱防風、大風のもとだ」

「何ですか。しかしね、先生さん、さつきから猫が居りますでせう。云はない事つてはないので、だから一言、お引き合はせを願はうと思つたのです。これは、どう云ふ猫で御座いますか」

「どう云ふ猫つて、襖を開けて這入つて來たんだ、風船さん」

「それはいけませんね。踊りますか」

「まだその暇はないんだ。さつき來たばかりでね」

「先生さん、猫の急所を御存知ですか」

「知らない」

「猫のお尻の所に骨がありますでせう。大股骨ですか」

「猫の解剖は知らないから、解らない」

「骨盤と云ふのか知ら。先生さん、有ります

骨ですか」

「猫の解剖は知らないから、解らない」

「骨盤と云ふのか知ら。先生さん、有ります

でせう」

「そいつを撫でて見れば解るぢやありませんか」

「いや、撫でて見なくても、有る事はわかつてゐるのですが、その名稱です。まあ何でもいから、猫のお尻の所に骨があります。その内側の柔らかい所へ指を入れて、真中に脊骨が通つてゐますから、脊骨の方へきゅつと締めると、きゅつと申します」

「そこが鳴るのですか」

「いえ、猫が泣くのです。急所ですから」

「面白さうだな」

「この猫でやつて見ませうか」

「およしなきい、可哀想に」とお神さんが云つた。

「それからね、奥さん」と今度はお神さんの方へ向いた。矢つ張り奥さんと呼んでゐる。

「猫の目玉を人指し指の指の腹でこすつてやりますとね、猫はそんな事を好きませんね」

「さうでせう」

「いやがりますね。きつと、いやなんでせう。やつて見ませうか」

「いけないわ、猫の目玉をこすつたりしては。風船さんは少し酔つてゐるんだわ」

「目玉をこするのは寒月さんの領分だ」と大入道が口を出した。

「先生さん、寒月さんと云ふ方は目玉をこすられますか。矢つ張り猫の目玉ですか」

「猫ではない。蛙の目玉ださうだ」

「蛙とは又風變りの考案ですね。かへろの目玉に灸すゑてか」

風船畫伯は手に持つてゐた杯をそこへ置いて、變な手つきをした。「それでも跳ぶなら跳んで見な。おツべけベツぽん、ベツぽんぽん」

「違ふよ、風船さん、おツびきびツとん、びツとんとんだよ」

「いいえ、先生さん、おツべけベツぽんです」

「しかしだね、風船さん、びきびツと云ふのは笛だよ。とんが太鼓だぜ」

「わたくしはさう思ひません。新派芝居の開祖川上晋次郎のおツべけべを傳へてゐるのは御座いませんか」

「さうか知ら。ふうん、さう云ふ異説があるかね。今まで知らなかつた」

「猫の目玉に灸すゑて、と校訂いたしませうか」

苦沙彌先生の許に出入した諸君子もいろいろな事を云つたが、この風船畫伯は無茶である。

吾輩多くを談せざらんがとす。

「それよりも、風船さんがお歸りになる前に、何とかしなければいけないんでせう」とお神さんが云つた。

「さうださうだ、風船さん、その持つて來た筋を引つ張らなくちや」

「はい、誠に相済みません」

「ところで、おい、お金は無かつたのではな

いか」

「さうなのよ」

「弱つたな」

「もう一昨日からありませんわ。でも何とかしなくちや。一寸、ひとツぱしりして來ませう」

「質屋か」

「あすこはもう遅いでしょ。蓮池の煙草屋のお婆さんに頼んで見るわ。どのくらゐ」

「さうだな。風船さん、二百兩でよろしいか」

「いえ、百兩で結構で御座います」

「しかし、已に一粒一滴の情勢では、すぐに無くなるからな。二百兩頼んで御覽」

お神さんがお勝手口から出かけた後で、風船畫伯は、どうも相済みませんと云つて、疊の上にお辭儀をした。昔、小判が通用した頃から我が猫族は金錢に恬澹であつて、猫に小判の諺が残つてゐる位である。吾輩も亦その後胤として、百圓であらうと十五錢であらうと、そんな事は全くの馬耳東風であるが、兩替町の金子善兵衛の店で寒月君が買ったツイオリンは五圓二十錢だつたと云ふの思ひ出し、お金がなく朝から御飯も食べられなかつたと云ふ風船畫伯に用立てるお金、百圓だ二百圓だと云ふのを聞いては正に隔世の感がある。猫の目の遷り變りどころの騒ぎではない様だ。大入道と風船畫伯がまだ止めずに酒を飲み續けてゐるところへ、お神さんがちよこちよこと歸つて來た。

「お待ち遠さま」

「貸してくれただか」

「はい二百圓」

帶の間から、重ねて二つに折つた百圓札を二枚取り出した。

「それはよかつた。さあ風船さん、どうぞお納め下さい」

「有り難う御座いました。相済みませんでした。一枚で結構で御座います」

「そんな事を云はずに。すぐ無くなりますよ。二枚持つていらつしやい」

「いえ、一枚で結構で御座います。有り難う御座いました」と云つて一枚だけ取り、懷に入れてからお辭儀をした。

「それでは、ねえおい、家にもお金がないんだから、この百圓は風船さんから借りておかうではないか」

「さうね」と云つてお神さんは曖昧な顔をした。吾輩が聞いても大入道の云ふ事は腑に落ちない。

風船畫伯は一旦懷かぶろにしまひ込んだ百圓札を又膝の上にひろげて、こんな事を云ひ出した。

「先生さん、この表の百圓と云ふ字の下に、赤い模様がありますでせう。この所がわたくしは、女の臀に見えますのでね」

大入道が風船さんから借りたと云ふもう一枚の方をひろげて、眺めてゐる。

「それをさう云ふ風に見るわたくしの氣持を形に取りまして、この百圓札を描き直して見

ようと思ひます」

「描き直してどうするのです」

「自刻自刷の版畫にいたします」

「どんな繪だか知らないが、百圓札の焼き直しはいかんね」

「いけませんか」

「おまけに自刷の版畫にして、幾枚も造つては穩やかでない」

「お金として刷るのでは御座いせんよ、先生さん」

「それでも、きつと怒られる」

「叱られますか」

「家宅搜索を受けて、版木を差押へられる」

「模寫ではないのですけれど」

「何の爲にかう云ふ物を造つたか、と云ふ事になる」

「何の爲でも御座いせん。他意あるに非ずと云つてやりますでせう」

「使ふつもりはなかつたと云ふのでせう。さう云つても現に贋のお札があつては、あかしは立たないね」

「それは先生さん、御無理です」

「御無理でも、御尤もな話ですよ風船さん、忍び込まなくても、泥坊は泥坊だ」

「それはお話が違ひます」

「寢てゐなくても、病人は病人だ」

「それはその通りで、坐つてゐる病人だつてあります」

「お金を持つても、貧乏人は貧乏人だ」

風船畫伯は暫らく黙つてゐたが、不意に鼻が鳴く様な聲を出して、ほッほッほと笑つた。

「成る程、それは先生さんの仰しやる通り、持つてゐても、持つてゐなくても、おんなじです」

「持つてゐる時の方が一層憐れだと云ふ事を自分で痛感する。なあ風船さん」

「その通りで御座いますよ、先生さん」

「それで百圓札の贋造を思ひ止まつて、先づ先づお目出度い」

「又あんな事を先生さんは云はれる。私は贋造紙幣を造るつもりなぞ、毛頭持つて居りません。わからない先生さんだ」

「全くわからない風船玉だ。つもりはどうあらうとも、百圓札をもとにして似た様な物を造らうと云ふのは贋造精神のいたす所だ」

「いいえ、わたくしの創造で御座います」

「創造ではない、偽造だ」

「偽造と申しますと、贋造とは違ひますか」

「よく解らないな、どうだらう」

「變造はいかがです」

「成る程、變造は少し違ふ様だな。變造紙幣は金額を書き直したりしたやつで、贋造紙幣とは別の物だ」

「同じ怪しからん事の中でも、區別を立てるとなると厄介ですね」

「變造はまた改造とも云ふと字引にあつたのを見た事がある」

「改造は雑誌の名前でせう」

「贗造、偽造、變造、改造。榮造と云ふ三文文士がゐたつけ、あつははは」と大入道が笑ひ出したと思つたら、いきなり起ち上がつて、「さあ風船さん、もう歸らないと遅くなる。電車がなくなる。風船さんのお歸りだ」と云つた。

風船畫伯は疊の上に兩手をつき、「色色有り難う御座いました。又大變御馳走様でした。そろそろお暇にいたします。しかし、まだ大丈夫で御座います。もう一獻戴きませう。まあまあお當て下さい先生さん」と變な挨拶をした。

「さうかな。大丈夫かな」と大入道は中途半端になつて、突つ起つてゐる。

「大丈夫、金の脇差し、その邊の加減はよく心得て居ります」

「どうかな。當てにはならないが、狓下^{げいご}がたつてさう云ふなら、もう一獻してもいい」

「まあ」

おとなしく差し控へてゐたお神さんが一言嘆聲を洩らした。かう云ふ時に下手に干渉すれば、却つて反對の結果を招く事を知り、その舵加減を心得てゐるのだと吾輩は推測した。

大入道はまた坐り込み、「それでは今度は麥酒にしよう」と云つた。

「そんなに召し上がつて、いいか知ら」とお神さんは口の中で云つて、二人の顔を見くら

べながら麥酒を運んで來た。

「また一しほで御座います」

風船畫伯はコップから手を離さない。

大入道は珈琲茶碗で飲んでゐる。口をつけたら一杯つゝ一息に飲んでいます。

「ちやんぼんすると廻りますね、先生さん」

「口先が變るからね。しかし麥酒とお酒ではちやんぼんにはならない。姿が違ひ、口當りが違ふだけで成分は同じ釀造酒だから、おなかに這入れれば同じ物だ」

「それでも麥酒とお酒をちやんぼんに飲めば酔ふと云ふではありませんか」

「迷信だよ風船さん。打破しなければいけない。さう思つて飲むから、そんな氣になる」

「それでは、ちやんぼんと云ふ事は御座いませんか」

「ない事はない。麥酒やお酒とキスキーとを一緒に飲めば、それこそ本當のちやんぼんで、さう云ふ酔ひ方をする。キスキーは蒸溜酒だから釀造酒とは成分が違ふ。違ふ物を一どきに飲めば、おなかの中でちやんぼんになる」

「はあ」と云つて感心した拍子に、風船畫伯は又麥酒を一杯飲み干した。

「一體僕は麥酒の方が好きなのだが、思ふにまかせぬから、お金がかかるのね、お酒を飲んでゐる。しかしお酒もうまい。かう云ふ好きな物を飲んで、食べる物でも同じだが、かうして杯なりお箸なりを口へ持つて行くで

せう。その時まだ口がふさがつてゐて、唇にぶつかつたと云ふ様な事はない」

「そんな覺えは御座いせんね」

「杯なり箸なりを迎へて、それを受け入れる様に口を開けるのは、いつ頃なのかね。どこ迄來たらさうするのか、考へて見ても決して解らない」

「猫に何かやつて、開けさせて見ませうか」

「駄目よ。お膳の物をやる癖をつけては後で困るわ」

「そりや駄目だ。強ひてやつて見ても、猫の場合には我々の規準にならない」

「矢つ張り自分でやつて見なくちやいけませんかね。時に先生さん、この猫は何と云ふ名前ですか」

「名前はまだ無い」

「そりや不便ですね」

「さうだわ、名前をつけてやらなくちや。今までだつて有つたんでせうけれど、猫に聞いてもわからないから、うちでつけるんだわね」

「命名式を致しませう」

「ちやあ、つけてやらうか。アビシニヤ」

「變な名前だわ」

「何だか聞いた様な名前です」

「名前なんかどうでもいい。あんまりいつ迄も下らない事はかり云ふので、つくづく退屈したから、脊伸びをしたら大きな欠伸が出た」